「特別な教科　道徳」における ICT 活用の有用性の検証

－生徒同士の考えの共有に着目して－

教育学研究科　教育実践創成専攻　教育実践開発コース　教師力育成分野　前田和奏

1.　はじめに

1-1.「道徳の時間」から「特別な教科 道徳」へ

2015 年 3 月、学校教育法施行規則及び小・中学校学習指導要領が一部改正され、2019 年より中学校で「道徳の時間」が「特別な教科　道徳」として新たに教科化された。

この改正の背景には、従来の道徳教育における課題があった。 量的課題と質的課題が挙げられ、具体的には道徳教育が他の教科に比べて軽視されていることや登場人物の心情を理解させることに偏りがちであった点が挙げられる。また、荒川・梶井(2024)も同様の課題を指摘しており、道徳教育の質的向上が求められていることが明確になっている。

このような問題意識を踏まえ、改正後の「特別な教科　道徳」では、目標、内容、教材や評価、指導体制の在り方等を見直しが行われ、道徳教育の趣旨を踏まえた効果的な指導が求められるようになった(文部科学省,2014)。

特に重要なのは、道徳教育の質的変換を目指す取り組みである。「自分ならどうするか」という観点から道徳的価値と向き合い、異なる意見をもつ他者と議論することを通して、道徳的価値を多面的・多角的に考えることが重視されている。また、「考え、議論する道徳」の質的変換が図られ、道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めることが期待されている。この質的変換は、発達の段階に応じ, 答えが一つではない道徳的な課題を一人一人の児童が自分自身の問題と捉え, 向き合うことを目的としている。

このような指導方法は、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指すもの(文部科学省, 2016）であり、道徳教育における質の向上に寄与するものとされている。

つまり、「考え、議論する道徳」は「主体的・対話的で深い学び」の視点から再構築されており、「どのように学ぶか」と学びの過程に焦点を当てることで、学習内容の深い理解が促進され、道徳教育における転換が実現されると考えられている。

1-2.　対話的な学びの重要性

中田・梶井(2020)は、「主体的・対話的で深い学び」の中でも、「対話的な学び」の重要性を強調している。「対話」とは、双方向の相互作用であり、自分の考えが相手に伝わり、それを相手が受け入れてくれることによってはじめて成立するものとし、「対話的な学びが行われることで、主体的な学びに向かう姿が生まれる」と述べている。(荒川・梶井,2022)。また、相手意識を持った上で、自ら取り組みたくなる主体的な性質(主体的な学び)と、多様な情報を基に自分の考えをより深める深化の性質(深い学び)を持っていると述べている。

このことから、筆者は「対話的な学び」が「主話的な学び」と「深い学び」へと繋がると認識し、対話的な学びを充実させることが重要だと考えた。

具体的に「対話的な学び」とは、子供同士の協働や教職員、地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深めるプロセスである(文部科学省，2017)。

本研究では、この「対話的な学び」の中でも「子ども同士の協働」に焦点を当て、特に「生徒同士の対話」を中心に考えることとした。

1-3.　自己内対話とは

松永(2018)は、対話的な学びについて「他者と異質性を認め合い対応し合う対話的関係のもと「他者との対話」と「自己内対話」が絡み合いながら形成される学びであり、それこそが「考え、議論する道徳」の基本である」と述べている。ま

た、土井(2020)は、「道徳教育における対話は、単なる意見交換にとどまらず、自己の価値観を深める重要な手段と述べており、これにより、生徒は自らの道徳的な価値観を形成し、物事を多角的に考える力を養うことができるようになる」と述べている。

このことから、筆者は「対話」だけでなく自己の価値観を深め、物事を多角的に考える「自己内対話」へと深化させることが重要であると考えた。

松永(2017)は、自己内対話を「自分が自分自身の考えを発展させるために、自分がそれでよいのか、他の見方や考え方はないのかなど自分に問いかけること」と定義しており、「他者との対話」を通じて深化し、発展することが期待されている(松永,2017)。

これらを通して、「対話」をするだけでなく、「自己内対話」へと深化させる工夫が求められると考えた。

1-4.「対話の困難さ」の軽減と展開の工夫

「対話」の充実が求められている一方、道徳教育における「対話」の実現には困難さを伴うことが先行研究で指摘されている。

司城・三輪ら(2011)は、対話の困難さを生じさせる要因として、第一に、児童の個人的特徴や教師の力量不足が原因、第二に、対話による恥ずかしさや劣等感など、社会的相互作用に起因する関係性の要因を挙げている。

さらに、宮道・藤生(2018)は、中学生の学校ストレス感受性に影響を与えるネガティブ感情について調査し、特に「恥ずかしさ・緊張」の感情が強く関係する学校場面として、人前で発表する場面や失敗場面を挙げている。これらのことから、「対話」を活発にするためには、「対話」の困難さを軽減した授業展開をする必要があると考えた。

学習指導要領(2017)では、授業展開や工夫について、「生徒と教師、相互作用の対話の深まり、議論の深まりが、生徒の見方や考え方の高まりを促すことから、課題に応じた活発な対話や議論が可能になるよう工夫すること」とされている。また、中田・梶井(2020)は、「対話における困難さを軽減させるためにも、今後、実践を通して、具体的な補助教材を提案していく必要がある」と述べている。

このことから、道徳科の学習活動を十分に行うためには、対話の困難さを軽減させる工夫が必要だと考えた。

そこで、本研究では、補助教材を ICT とし、匿名性を導入することで、対話の困難さを軽減しながら学習活動を行えるのではないかと考え、研究を進めた。

2. 研究目的

Figjam(ICT)を使用することにより、生徒同士の対話が活発になり、「主体的・対話的で深い学び」を実現することができるのか検討することを目的とする。

3. 研究方法

3-1. 調査対象者

山梨県内の中学校に在籍する生徒 2 年生 2 クラス(56 名)と授業実施者(2 クラスの担任教師)

3-2. 調査方法

筆者が Figjam 使用した授業を作成し、2 クラスの担任教師が授業を実施した。その後、授業終盤に Google フォームのアンケート調査を行った。また、授業後に、授業実施者(2 クラスの担任教師)にインタビュー調査を実施した。

3-3. 調査内容

題目　　：裏庭での出来事
価値項目：自主・自立・自由と責任
授業数　：各クラス 1 回
調査①　：生徒へのアンケート調査
調査②　：先生方へのインタビュー調査

3-4. 調査①生徒へのアンケート調査

10 項目の質問を作成し、Google フォームのアンケート調査を行った。質問項目に対する回答は「当てはまらない」「あまり当てはまらない」「どちらでもない」「やや当てはまる」「当てはまる」の 5 件法で回答を求めた。研究については、ICT（Figjam）の匿名性の効果について研究するため、質問項目を 4 つに絞ることとした。(表 1)

表 1. アンケート調査質問項目

①	Figjam を使用した道徳の授業は、使用しない道徳の授業と比べて、クラスメイトに自分の意見・考えを伝えやすかったですか？
②	普段、自分の考え・意見に自信が持てないことはどのくらいありますか？
③	この授業のように、他の人に自分が何を発言したか分からない方が自分の意見・考えを伝えやすいと思いましたか？
④	Figjam を使用した授業の感想を教えてください。

3-5. 調査②授業実施者へのインタビュー調査

授業実施者 (2 クラスの担任教師)に対して、3 項目の質問項目を軸に半構造化インタビュー調査を実施した(表 2)。iphone のアプリであるボイスメモを用いて録音し、まとめた。

表 2. インタビュー調査質問項目

①	ICT 機器使用についての考え 前後の変化・比較
②	これからどんな場で使用したいと考えるか
③	ICT 機器使用の課題 メリット・デメリットから

3-5. Figjam について

情報共有ツールを Figjam にした理由は、主にリアルタイムでの共同作業を促進し、迅速な意見交換とフィードバックを可能にする点にある。このツールは、アイデアや思考を整理しやすく、複数の参加者が同時に作業できるため、効率的なコミュニケーションが実現する。さらに、Figjam を用いることで、クラス内の意見を可視化し、参加者間での対話を促進することが可能になると考えた。

4. 調査結果

生徒へのアンケート調査の①～③結果を円グラフで示した。円グラフでは、外側の数字が回答者数、内側の数字が各選択肢の割合を示している。

4-1. 生徒 56 名へのアンケート調査

①Figjam を使用した道徳の授業は、使用しない授業と比べて、クラスメイトに自分の意見・考えを伝えやすかったですか？という質問に対して、「当てはまる・やや当てはまる」と回答した生徒は、56 名中 47 名であり、全体の約 8 割であった。(図 1)

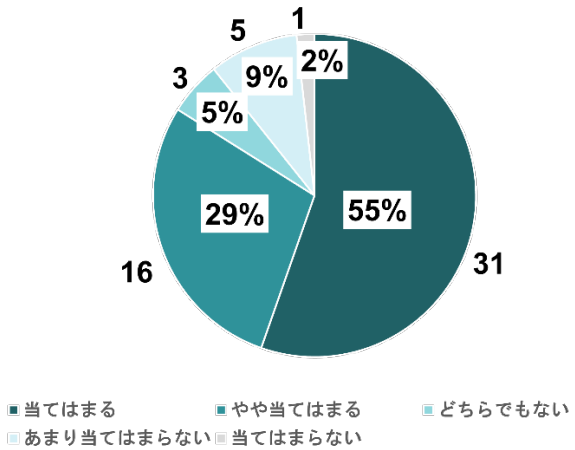

図 1

②自分の考え・意見に自信が持てないことはどのくらいありますか？という質問に対して、「当てはまる・やや当てはまる」と回答した生徒は、56 名中 27 名であり、全体の約 5 割であった。(図 2)

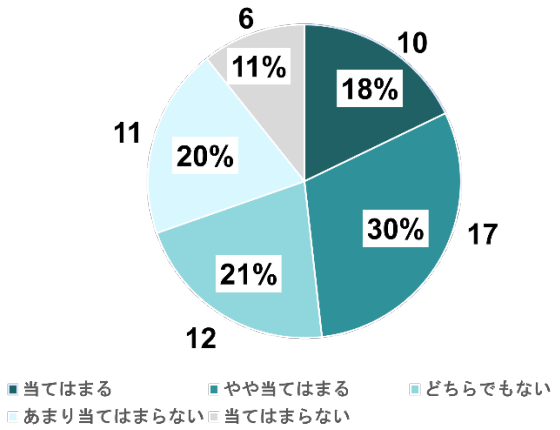

図 2

③この授業のように、他の人に自分が何を発言したか分からない方が自分の意見・考えを伝えやすいと思いましたか？という匿名性についての質問に対して、「当てはまる、やや当てはまる」と回答した生徒は、56 名中 36 名であり、全体の約 6 割であった。(図 3)

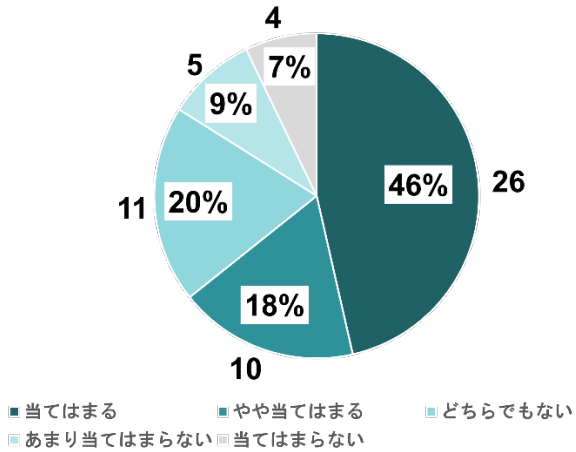

図 3

ここで、②③の結果を関連付けて考えた。②③の質問に「当てはまる・やや当てはまる」と回答した生徒の割合を示した(図 4)。

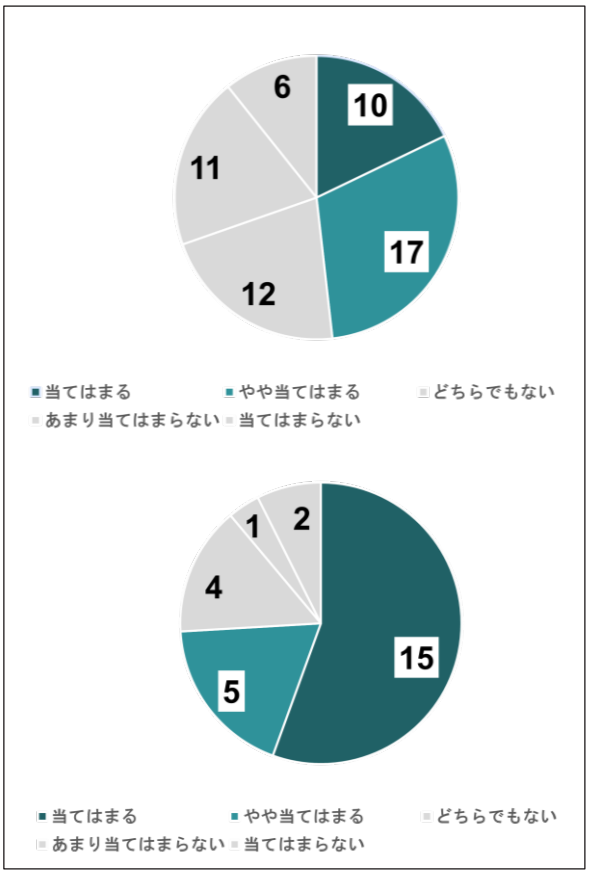

図 4

表 3. ④Figjam を使用した授業の感想
（自由記述)20 名の自由記述抜粋

- 誰が言ったか分からなかったので、自分の意見を書きやすかった。
- 自分の意見が相手に分からないのが良かったです。
- 言葉が伝えやすい
- みんなに自分の考えを伝えやすくていい
- みんなの意見が見れたりするのが良かったです。
- 誰の意見か分からず、意見を言えるとやりやすいし、しっかり自分の意見を書けて楽しかったです。
- 他の人の意見を持つことができて新しい考えになったものもあった。

以上、生徒へのアンケート調査を踏まえると、「自信が持てない」生徒 27 名のうち「他の人に自分が何を発言したか分からない方(匿名性)が自分の意見・考えを伝えやすいと思いましたか？」という質問に「当てはまる」「やや当てはまる」と回答した生徒は、20 名であった。自由記述を見ると、②の質問に対して「当てはまる・やや当てはまる」と回答した生徒は、匿名性の良さについての回答が多かった。このことから匿名を利用した回答方法は、自信が持てない生徒にとって意見を伝えやすいという良さがあると考えられる。

さらに、「みんなの意見がわかって納得できることが多くなった」「他の人の意見を持つことができて新しい考えになったものもあった」という自由記述からは、他者の意見・考えを踏まえて考えたことが分かる。この記述から、ICT の良さや対話をすることに限らず、他者の意見・考えを深める自己内対話ができた生徒もいたと考えることができる。

4-2. 授業実施者 2 名へのインタビュー調査

授業実施者へ半構造化インタビュー調査を実施し、得られた回答を右の表 4 に示した。

①の結果では、ICT（Figjam）を使用したことにより、「他の人の回答を見たから回答しやすい」「他の回答を参考にしながら書ける」という意見が得られた。この回答から、視覚的な情報を得ることが ICT の利点として認識されていることが分かった。また、「グループだけでなく遠くの人の意見も見れる」という意見もあり、これにより、普段のペアやグループワークでの意見共有に加えて、クラス全員の意見や考えを共有できる点に価値を感じていることが考えられる。これらの結果から、ICT を効果的に活用することで、多くの意見交換が促進されるのではないかと考えられる。

②の結果では、道徳の授業において「匿名での回答方法」が有効であるという意見が得られた。特に、回答しづらい質問に対して、匿名性が生徒の心理的な障壁を低くし、生徒が意見や考え

表 4. インタビュー調査の回答

①ICT 機器使用についての考え 前後の変化・比較
【使用前】 ・使わないとと思ってはいたけど… ・準備が大変 ・思った通りにならない ・ICT を使うことがメインになりそう ・細かい情報を知っておかないと授業で使うことが難しい 【使用後】 ・使い方次第で有効活用できる ・他の人の回答を見たから回答しやすい ・使い始めれば便利 ・グループだけでなく遠くの人の意見も見れる ・他の回答を参考にしながら書ける
②これからどんな場面で使用したいと 考えるか
【道徳】 人それぞれの考え方や価値観など、回答しづらい質問に回答する場面で有効 →「匿名性」は大きい
③ICT 機器使用の課題 メリット・デメリットから
【生徒】 ・匿名性だと言いやすい ・生徒が後からでも見返せる 【教師】 ・時短(配る必要がない，話す時間の確保) ・発言が少なくても意見を見てピックアップすることができる 【共通して】 ・視覚的な情報が得られる ・中間がとれる

を表現しやすくする効果があると考えられる。

③の結果では、ICT の導入により、得られる複数のメリットが明らかになった。

第一に、生徒は「匿名」での回答が可能になり、上記でも述べたが、意見や考えを表現しやすくなることが分かった。また、教師と生徒両者に共通したメリットとしては、「視覚的な情報を得られる」ことである。視覚的情報を得ることで、教師のメリットにもある「発言が少なくてもピックアップすることができる」ことに繋がる。また、生徒視点でも「他の人の意見を見て回答することができる」ことから、クラス全員の意見や考えを視覚的に確認できるため、他の人の意見を参考にしながら回答できるようになる。このように、視覚的な情報が対話の幅を広げ、授業の質を向上させることに繋がったと考えられる。

以上の結果から、ICT の使用は生徒と教師双方にとって有効であり、道徳教育における意見交換や学びの深化を促進する手段として重要であることが明らかとなった。

5. 研究結果と考察

本研究では、道徳教育における活発な対話を促進するために、補助教材として ICT を使用し、匿名性を導入することが有効か検証した。調査の結果、ICT 活用による利点として、主に 2 つが挙げられる。

第一の利点は、「匿名での回答が可能である」ことである。生徒が自分の意見を匿名で表現できることにより、発言に対する心理的な抵抗が軽減され、自由に意見を述べやすくなる。この結果、発言への不安が減少し、より多くの生徒が積極的に意見交換に参加することができると考えられる。これにより、活発な対話が促進される可能性が高まると言える。

第二の利点は、「視覚的な情報を得ることができる」ことである。ICT を活用した情報共有ツールでは、自分の意見を表現するだけでなく、他の生徒の意見を視覚的に確認することができる。これにより、他者の視点を参考にしながら自分の考えを深めたり、新たな視点を取り入れたりすることができる。このプロセスは意見交換をより活発にし、思考を深める効果があると考える。特に、「視覚的な情報」の提供は、ICT ならではの大きなメリットだと言える。

これらの利点を踏まえると、ICT を用いた情報共有ツールは、生徒間の対話を促進する有効な手段であることが分かる。

さらに、道徳教育の特質を考慮すると、「答えが 1 つではない課題」に取り組むことや「道徳的諸価値に対する考え方は人それぞれ異なる」という点が重要である。生徒それぞれの考え方や価値観を理解する機会を提供することは必要だが、道徳科の特質を踏まえると、意見を共有することに自信を持てない生徒もいることが考えられる。そこで、ICT を活用した「匿名性」や「視覚的な情報の提供」は、道徳教育において非常に有効な手段となり得る。

これらの結果を踏まえると、ICT を活用した情報共有ツールは、道徳的な議論を深め、対話を促進する重要な要素であることが示唆される。このように補助教材を工夫することは、生徒の内面的成長を促進するために必要な要素であることが再確認された。

さらに、国が求める学びの姿勢とも合致する点で、ICT の活用は、非常に重要であると考えられる。生徒が意見を表現する際の負担が軽減され、結果として活発な対話が促進されたことから、ICT を補助教材として活用する価値が高いことが言えると考える。

6. 最後に

6-1. 本研究のまとめと課題

本研究では、ICT の活用により対話を促進できたものの、これが「対話的な学び」に繋がり、「主体的・対話的で深い学び」を実現できたかについては断定できない。また、アンケート調査の結果からは ICT を活用することで自己内対話ができたという感想が寄せられたが、その一方で、どの程度自己内対話へと深化したかは不明確な意見もあった。この結果を踏まえると、ICT の活用には一定のメリットがあることは確認できたものの、それだけではなく、授業の展開や発問の工夫も不可欠であることが分かる。

さらに、本研究にはいくつかの課題が残されており、今後の研究において以下の点について深掘りが必要である。

第一に、各クラスの実態や生徒同士の関係性に踏み込んだ調査が不足している点である。生徒間の関係性やクラスの環境が対話に与える影響について、さらに詳細な調査を行うことが重要である。これにより、対話がどのように促進されるか、または阻害されるかについてより深い理解が得られると考える。

第二に、匿名性が生徒の心理や発言内容に与える影響についての検討が不足している点である。匿名での意見表明が生徒の自信や発言の質にどのように作用するかについて、今後の研究で更に深掘りする必要がある。特に、匿名性が発言内容に与える変化を細かく分析し、どのような心理的効果が生徒に生じるのかを明らかにすることが重要であると考える。

第三に、本研究の対象者が 56 名と少人数であった点である。調査対象者を増やし、異なる背景や学年の生徒を対象にすることで、結果の妥当性を高めるとともに、異なる条件下での一般性を検証することが求められる。これにより、より信頼性の高い結論を得ることができると考える。

6-2. 今後の展望

道徳教育において「自己内対話」を促進するためには、対話型授業をどのように展開・工夫するかが重要な課題である。今後、ICT の活用に加え、授業の展開や発問方法の工夫を組み合わせていくことが必要である。これらを実践的に取り入れ、道徳授業の在り方をより効果的に見直すための一考察として、本研究を位置づける。

7. 参考・引用文献

荒川怜奈・梶井芳明(2024) 「特別の教科 道徳」における対話と ICT 活用に関する研究の今後の展望東京学芸大学紀要総,合教育科学系,73:109-118

近藤広理・植田和也・金網知征(2022)「中学校 1 年生における道徳授業における道徳授業に関する意識調査」香川大学教育実践総合研究，44:61-68.

中田順子・梶井芳明(2020) 「道徳科の授業における発言や対話が 道徳的価値観や生き方についての理解や考えにもたらす影響」東京学芸大学紀要　総合教育科学系 71: 81-88,

松永康史(2017)「『考え，議論する道徳』と対話的な学び-対話による授業づくりへの視座-」桜花学園大学保育学部 研究紀要 16 p125-138

松永康史(2018)「『考え，議論する道徳』と対話的な学び：内容項目『個性の伸長』についての考察」桜花学園大学保育 学部研究紀要 17 p159–174

土井 雅弘(2020)「対話を重視した道徳科の授業をイメージする」開智国際大学紀要第 19 号

文部科学省(2014)「道徳に係る教育課程の改善等について(答申) 」中央教育審議会

文部科学省(2016)「幼稚園，小学校，中 学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」（中央教育審議会答申）

文部科学省(2016)「考える道徳への転換に向けたワーキンググループ　議論のまとめ案についての参考資料」考える道徳への転換に向け WG 資料 4

平田オリザ(2012)「わかりあえないことから　コミュニケーション能力とは何か」p94-96

宮道力・藤生英行(2018)「中学生のネガティブ感情に関連する学校ストレス感受性項目の収集と分類」岡山大学全学教育　学生支援機構教育研究紀要第 3 号 17-30